

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2022」 入賞作品

目次

★優秀賞

神戸大学 国際人間科学部環境共生学科 2年	宮崎 遥.....2
慶應義塾大学法学部法律学科 4年	山口 翔太.....3
株式会社 Velodash Japan	関口 大樹.....5
	金月 綾.....6
愛知大学 現代中国学部現代中国学科 2年	光井 大和.....7
津田塾大学 学芸学部国際関係学科 2年	磯上 潤奈.....9
(株)エイチティープランニング インバウンド事業部・通訳翻訳事業部 課長	
	木村 吉貴.....10
アメリカ創価大学 リベラルアーツ 3年	佐藤 優菜.....12
桐朋学園大学 音楽学部 4年	佐伯 茜.....13
神戸大学 国際人間科学部 子ども教育学科 4年	羽瀬 彩乃.....15

★入賞

近畿大学 国際学部国際学科東アジア専攻中国語コース 4年	徳永 潤.....17
都立中央図書館	岡部 達美.....18
早稲田大学 文学部中国語中国文学コース 2年	高宮 ゆり子.....20
共立女子高等学校 2年	赤松 桜花.....22
株式会社小学館	葛 里華.....23
	尾崎 純一郎.....25
志學館大学 人間関係学部人間文化学科 3年	山下 真奈.....26
工学院大学 情報学部情報デザイン学科 4年	神田 真帆.....27
株式会社テレビ東京総合編成局アナウンス部	池谷 実悠.....29
アクセンチュア(株) Strategy & Consulting	清水 美雪.....30

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2022」

★優秀賞

中華と文明

神戸大学

国際人間科学部 環境共生学科 2年

宮崎 遥

私と中国との関わりの原点は、日本の漫画『キングダム』である。『キングダム』は、主人公の信と、後に始皇帝となる政を中心に、彼らの仲間と共に、秦の中華統一を目指すという物語だ。作中で、後に始皇帝となる政が、「中華統一の後に出現する超大国は、500年の争乱の末に“平和”と“平等”を手にする”法治国家”だ」と言う。つまり秦国が他国を支配するのではなく、法によって新しい国を形成するという意味である。私は、このシーンに心を動かされ、中国の歴史やその文明に興味を持つようになった。秦の始皇帝が法家の思想によって中華統一を成し遂げたことは事実である。万里の長城や兵馬俑などの建築物も秦朝の遺産として有名である。秦がこのように中華統一を成した紀元前 200 年ごろ、日本は弥生時代である。私は、弥生時代の日本と、秦の文明とを比較した時、その文明発達の差異に驚いた。日本は7世紀から中国の隋の律令を模範とする体系的な法典としての律令法典が施行され、法整備以外にも、米作りや漢字、仏教、貨幣など、現在の日本では欠かせないものや技術が多く伝わってきた。つまり、日本の文明の原点は中国にあると言っても過言ではない。更に大学の中国語の授業では、紙、印刷術、火薬、羅針盤の四大発明が古代中国のものであるということも学んだ。歴史を振り返ると、人類文明の観点で、中国が残してきた功績は非常に大きい。

そして、21世紀の現在、中国は科学技術が急速に成長し、再び人類文明の発展を成し遂げようとしている。特に、私にとって印象的だったのは、中国のスパコン(スーパーコンピュータ)である。2016年にスパコンTOP500の1位にランクインした「神威・太湖之光」。私は、初めてその名を見た時、「名前、めっちゃカッコいいやん…ナニコレ」と思ったのを覚えている。よく調べてみると、当時、その性能は他国と圧倒的な差をつけての1位であり、TOP500にランクインしているスパコンは中国の開発によるものが最多という結果になっていた。

私は、以前ニュースで、中国の研究開発費が年々増加しており、大学には最新の実験装置や機器が設置され、若手の優秀な研究者が山ほどいることを知った。大学院生に対する研究費の資金供給・環境設備も充実していると聞いたことがある。中国と比べると、日本

の大学は、最新の実験装置や機器が完全に整っているわけではなく、研究者の給与も低く、大学の研究資金は不足し、研究がしたくてもできない状況である。日本の優秀な学生は、日本で研究を行うことなく、海外に行ってしまうこともある。こうして日本の若手の研究者は育つはずもなく、日本の科学技術は国際的にも衰退していつている。日本が、研究者を増やし、科学技術を強化していくには、中国に習うべき部分が多い。

さらに、ゲームやドラマなどの映像技術の面でも、圧倒的に技術が向上していると思われる。コロナ禍で何となく見始めた中国ドラマ、そして原神のゲームに関しては、そのクオリティが私の予想をはるかに超えており、予想外に面白い。まさに青天霹靂である。

「中華」は「世界の中央にある文明の地」という意味である。「中」は中央を、「華」は礼文が盛んなことを意味し、漢民族が頂点にあることを示す。まさに、今その意味通り、文明の前進を遂げているのは確かである。しかし、文明の発展は、必ずしも地球、そして万人に対して善の結果をもたらすとは限らない。私は、その革命的な文明の発達や技術が、世界の平和と人々の幸福を実現するためのものであってほしいと願う。日本は、再び中国の文明から学ぶ時代が来ている。そして私達は、いつまでもその革新的な文明に対して受動的であってはならない。かつて漢字から平仮名や片仮名を生み出したように、その学んだものを私達なりに、その時代、あるいは自国のニーズや次世代の地球環境、地球人に向けて変革していくべきなのだ。

山川異域 風月同天

慶應義塾大学
法学部 法律学科4年
山口 翔太郎

大学に入学するまで、私にとって中国は遠い存在だった。

私は両親共に日本人の家庭で生まれ、もちろん中国での生活経験もない。小学生の時、三国演義を読んだことがきっかけで中国の歴史に興味を持っていたものの、中国に対しては漠然としたイメージしか持っていなかった。例えば、当時、「中国」といわれてまず思いついたのは麻婆豆腐である。「中国人はみな辛い食べ物が得意」と長年勘違いしてきた私は、後に浙江省出身の友人が辛いものが苦手だと知った時は強い衝撃を受けた。

大学入学後、第二外国語として初めて中国語を学んだ。日本語にはない四声の存在やそり舌音に悩まされ、1年時の中国語の成績はギリギリ単位がもらえる「C」だった。しかし中国人のルームメイトや先生方の親身なサポートに加え、歴史的な逸話を背景とした成語に魅了されたことで私の中国語は徐々に上達していった。そして何よりも中国の歴史や食

文化への憧れが私の学習モチベーションを保ってくれた。大学の専門が法律学であったことから、大学 2 年生の時、中国法に強い興味を持つようになった。しかし日本で中国法を学べる機会は少ないため留学を志すようになり、ついに憧れだった北京大学で法学を学ぶ機会をいただいた。2020 年のことである。しかし当時はこれから未曾有のパンデミックが起こるとは、思いもしなかった。

2020 年に突如として現れた新型コロナウイルス。それは地球に暮らす全ての人々に大きなショックを与え、困難をもたらした。そしてそれは私にとっても同様であった。中国政府の奨学金をいただき北京大学で学ぶはずだった私の留学は、この未知のウイルスによって叶わぬものとなった。留学を目標に必死に中国語を勉強してきた私にとって、留学の中止が与えたショックは計り知れないものだった。

幸いにもオンラインでの開催が決まり、日本にいながら授業を受けることができたものの、現地での生活や対面授業への憧れは心の中に残り続けた。友人に会うたびに言われる「まだ日本にいたんだ」、この一言が胸に刺さった。そして一時は、中国語を学ぶ目的を見失いそうにもなった。

しかし他方で、コロナウイルスが私にとって希望を与えた側面もある。まず、この未知のウイルスに直面した武漢の人々が一致団結し闘う姿は、全世界の人々を勇気づけた。それと同時に、政治や地域の差異を超えて、世界中の国々がウイルスと戦う中国へ多大な援助を申し出た。それに対し、真っ先にコロナを乗り切った中国は、今度は援助する側として、マスクをはじめとした医療用物資や累計 22 億回分にもものぼるワクチン等の積極的な支援を行い、武漢の旧恩に報いた。

山川異域 風月同天

日本の HSK 事務局が湖北省へ送った支援物資に書かれていたこの言葉は、唐代の日中の仏教交流の逸話に由来するとされる。

鴻雁北 一衣帯水の 絆かな

2 ヶ月後、今度は日本でコロナウイルスが拡大する中、浙江省のある企業がこの俳句を添えて支援物資を日本へ送った。

確かに世界中の多くの国々は、お互いに歴史や政治上の問題を抱え、時には互いを憎み合い、歪み合うことも少なくない。しかしこれらの言葉が示す通り、私たちはたとえ住む場所や国籍は違えど、同じ空の下に暮らす地球人だ。

コロナウイルスの流行からもうすぐ 3 年が経とうとしている。しかし今回、この未知のウイルスに対して各国が手を取り合い、互いに助けあったことは、国際平和実現への大きな一歩になると私は信じている。

なお、現在に至るまで、上述した中国への渡航は実現できなかった。しかし、諦めることなく中国語の学習は続け、8 割を超えるスコアで HSK6 級に合格することができた。

そして現在、私には日中間の架け橋となる法律家になるという新たな夢がある。その夢に向かって日々勉強に励み、いつの日か弁護士として、今回は実現できなかった中国への留学に再挑戦したいと思う。

心連心－21世紀をともに生きる私たち－

株式会社 Velodash Japan

関口 大樹

「君は哲学を持ちなさい」2009年夏、重慶。あるおじさんに言われたその言葉の意味は、19歳の僕にとっては分からなかった。

物心ついた頃から海外に関心が高かった私は、大学入学後すぐに留学生と日本人がともに暮らす留学生寮に入った。世界各国の友人たちと共同生活をする中で、中国出身の女性と交際するようになった。

当時、私は韓国語を専攻していて、中国語はほとんど分からなかった。だが、お付き合いを通して、簡単な単語や挨拶を教えてもらい、中華圏のポップミュージックにも触れ、聴講で中国語クラスにも参加させてもらって学びはじめた。まるでふたりの仲を深めるかのように、少しずつではあるがしだいに中国語の簡単な言い回しも出来るようになっていった。

だが、楽しい時間は長くは続かない。交換留学生だった彼女は中国に帰らないといけないう時期が来てしまった。当時はスマートフォンやコミュニケーションアプリもない時代、国と国との距離は遠かった。私たちふたりは大泣きしながら空港で別れた。夏休みに中国に会いに行くことを約束してー。

初めての一人での海外旅行、右も左も分からない中、上海でのトランジットを経て重慶へと向かった。機内では隣に座る中国人のおじさんとすぐに仲良くなった。人と人との距離間の近さを感じた。空港に到着して彼女と再会した時、まるで数年ぶりに会ったかのようにまたふたりは大泣きして抱きあった。彼女のお母さまが車で迎えに来てくれ歓迎してくれた。車窓から見える中原の広い大地と人々の暖かさに触れ感動を覚えた。

ある時、彼女の一家と家族ぐるみの付き合いがある人と食事をするようになった。訪問すると、なんと日本語が達者なおじさんがいるではないか。その方は大学教授で日本にも留学経験があったのだ。「きみは中国のことをどれくらい知っているか？」彼女の故郷の重慶や四川省について日本語で教えてくれた。

僕は高校生の時にテレビで見た世界遺産「九寨溝」に行くのがずっと夢だという話をした。すると「よし分かった」と一言。なんと九寨溝への旅費を出してくれると言うのだ。早朝からバスに揺られ、砂埃がたつ道なき道、広大な高原や山を超え、10時間以上かけて目的地にたどり着いた。エメラルドブルーに輝く美しい湖、高山の澄んだ空気、圧倒的な美しさを放つその姿は、当時日本のテレビで報道されていた「環境汚染が進む中国」とは全く異なるものであった。

美しい大自然の一方で、帰りの車窓から見た景色は残酷だった。前年に発生した四川大地震、最も被害を受けた汶川県をバスは進む。土砂崩れで埋もれてしまった村や川、山から転がってきたビル数階分の高さの大きな岩、崩壊した橋や道路を横目に同乗していた人全員が言葉を失っていた。だが、各地に紅い旗がはためき、政府が提供する住宅もたくさ

ん建設され、復興への歩みは着実に進んでおり、災害の中から立ち上がる人々のたくましい姿も印象的だった。

中国を経つ最終日、お世話になった日本語のできる大学教授のおじさんと共に、食事をする事となった。そのとき彼が僕に伝えた一言が「君は哲学を持ちなさい」だった。

近年、日本を含め世界的な気候変動や災害が問題になっている。中国の重慶でも大雨によって長江の水が溢れ出す年もあれば、川底が見えてしまうほど干ばつが続く年もある。そんなニュースを見る度に、現地の人は大丈夫だろうかと人々の顔が頭に浮かぶ。

世界は繋がっていて、どんなところにも生活があり、人々が暮らしている。21世紀に生きる私たちは国を超え、同じ課題を抱えながら生きている。国同士のいがみ合いではなく、力を合わせて共通した課題を解決していくことが大切だろう。私も「哲学」を持って生きられるようになったのだろうか。あの夏と中国の人々を思い出しながら、そんなことに思いを馳せている。

日本と中国の架け橋

金月 綾

「上着、着ていきなさいね。」登校前、私の身を案じて中国人の母はそう言った。体操服の胸元には「中華」の2文字。日本人の父と中国人の母の間に生まれた私は、在日中国人学校に通っていた。当時、中国漁船と日本の巡視船の緊迫した状況や、日系店舗の窓ガラスを割る反日デモの様子などがひっきりなしに報道され、日本人と中国人の間に不穏な雰囲気漂っていた。

その数日前のことだった。駅で電車を待つ私に見知らぬ男が近づき、突然頭を叩かれた私がホームに転落しかけるという事件があった。「この中国人が！！日本から出ていけ！！」と叫んだ男の目は怒りの色に染まっていた。駅員さんと、通学路を巡回中だった先生に取り押さえられた男はそのまま警察に連行された。当時小学生だった私に幸い怪我はなかったが、この件はちょっとしたニュースになったのだ。この日以降、中国語を人前であまり話さないように、制服や体操服の「中華」のマークを隠すように、母は口酸っぱく言うようになった。

当時、清掃委員をしていた私は毎朝7時すぎに学校に行き、歩道を掃除することが日課になっていた。清掃委員の仕事は主に学校周りの歩道の掃除で、ゴミの日には近所のお年寄りの家に出向き、ゴミ捨てを手伝うこともあった。「中国人学校の子たちは大きな声で挨拶してくれるし、地域の清掃もしてくれて、本当にいい子が多いね。いつもありがとう。」そう言ってもらえたときはとても嬉しかった。こんな時だからこそ、中国人の悪いイメージ

ジを払拭しなければと、その頃の私はいつもより張り切って掃除をしていた。

帰宅前のホームルームの時間、先生はいつもより少し遅れて教室に入ってきた。強張った表情の先生は、重い口を開いた。「皆落ち着いて。怖がらずに聞いてください。さっき学校に『中国人学校の生徒を殺す』と殺害予告が届きました。保護者の方が迎えに来られる人は連絡してください。そうでない人は順番に集団下校をするので先生に教えてください。」生徒の中には怖くて泣き出したりパニックを起こしたりする人もいて、教室内は一時騒然となった。何とか生徒たちを落ち着かせた先生は、ホームルームの最後にこう言った。「皆これだけは分かってください。日本人みんなが悪い人ではありません。中国と中国人を憎んでいる人がいるのは確かですが、そうでない人もいます。あなたたちは日本と日本人に対して憎しみの気持ちを持つてはいけません。この学校は日本と中国の架け橋となる人を育てるためにできた学校です。あなたたちは日本と中国の架け橋なのです。そのことを忘れないでください。」この言葉は大人になった今も、私の胸に強く刻まれている。

そして、先生に連れられ学校の外に出ると驚くべき光景が広がっていた。いつも挨拶をしていたご近所の方々が、歩道に列を成していたのだった。毎週ゴミ捨てを手伝っていたおばあさんもその中に立っていた。驚く私に先生は「ご近所の皆さんが生徒の帰宅の見守りに協力すると申し出てくれたのですよ」と言った。「ありがとうございます」とお礼を言う私たちに近所の方々は「こんなことをする日本人がいるなんて、本当に恥ずかしい。ごめんなさいね。」「怖かったよね。絶対大丈夫だよ。私たちがあなたたちを守るからね」と優しく声を掛けてくれた。日本人によって傷つけられた幼い私の心は、日本人の温かさに救われたのだった。

中国と日本の中に生まれた私は、日本にいても中国にいても、辛い体験を避けられないことがある。日本人でもあり中国人でもある私は、日本人でもなく中国人でもないからだ。そんなときはいつも幼い頃のこの出来事を思い出す。日本と中国の架け橋、そこに私の居場所はあるのだと。

国境を越える“おもてなし”

愛知大学

現代中国学部 現代中国学科 2年

光井 大和

私の両親は“反中国”だった。テレビで大気汚染や、治安に関するニュースが報道されるたびに、彼らが必要以上にそれらを非難する言葉を幼い頃から聞いていた。時にそれは、民族性をも否定することもあった。日中関係への理解・歴史背景を知らなかったその頃の私

は、両親に対して「どうして」という疑問を常に抱いて、胸が苦しかったのを今でも覚えている。そして同時に、日中関係に対する興味を持ち出した。

高校生の時にイギリスのホテルで働くある日本人のドキュメンタリーを見た。そこで、肌の色・言語、そして文化が違う中、それらを全て加味しながら、ただひたむきにお客様の幸せを考える姿が目に入った。その瞬間にホテルマンへの大きな憧れとホテルができる日中関係改善に対する小さな可能性が見えた気がした。そして、大学生になりその小さな可能性を確信に変えてくれる体験をした。

大学では現代中国について、文化や、政治などの多角的な目線を用いて研究している。ある中国文化についての授業で、中国国内には「医食同源」と呼ばれる文化が存在していることを知った。この考え方は主に、口するものは全て生命・健康に直結する源だというもので、食事を大切にすることであった。ここで最も驚いたことは、氷の入ったものや、冷たすぎる飲み物を好まない地域もあり、そこでは体が冷える可能性が彼らが好まない1つの理由だという。

現代中国に対する研究を進めるのと同時に、私はホテルで宴会サービス員としてアルバイトを始めていた。そして、ある夕食会で中国人の夫婦と出会った。その時、私の認識として彼ら以外のお客様は全て日本人で、サービス員は彼らを中国人だとは知っていたが、特に何も気にせず接客をしていた。彼らのテーブルを見に行くと、氷の入ったお水が全く手をつけられていないことが分かり、私はすぐに「氷が入っていない飲み物もございますが、他に何かいかがでしょうか」と尋ねると、日本語が少し話せる旦那様が笑顔で「日本でその質問をされたのは初めてです。私は冷たい飲み物が苦手なので本当に助かりました。常温のお水を下さい」と答えを頂いた。私は今でも彼の笑顔を忘れることができない。そして、慣れない土地であるからこそ、ほんの少しの配慮が一人一人の日本に対する印象を良くすることが出来るのではないかと考えました。また、少しの配慮もなければ、逆の感想を持たせてしまうことになるでしょう。

日本と中国のメディアの伝え方には1つの“共通点”があると思います。それは相手国の良いニュースよりも、悪いニュースの数の方が多いことです。人と人がコミュニケーションを取る上で最も欠かせない“相手の良いところ”を手軽に知ることが難しいのが現状です。だからこそ、今の日中関係には良さを知ることができる機会が必要だと思います。そして、その機会に最も相応しい場所が“宴会”ではないかと、アルバイトの経験を通して考えました。特に私がやりたいことは、両国の影響力のあるアーティストをお呼びした食事付きの音楽イベントです。音楽と食事の双方の文化交流が互いの良さを見出す最善の方法だと思います。それらが各国で放映されたとすれば、国民が相手国を知りたいという大きな糸口になるのではないかと考えています。私は現在これを成功させることを目標に中国への研究、そしてアルバイトを日々頑張っています。もちろん、途中で疲れて、辞めてしまいたくなる時もあるのですが、そんな時にいつも自然と脳に浮かんでくるのがあの旦那様の笑顔です。彼の笑顔のような記憶に残る“おもてなし”を私はしていきたいです。

今

津田塾大学
学芸学部 国際関係学科 2年
磯上 潤奈

8年前、日中関係は冷え込みにあった。不穏な情勢の中、日本に飛び込んだ1人の中国人女子高生がいた。

『えっ、中国人を受け入れるの。なんで。』否定的な友達の一言。8年前、国際交流基金による中国高校生長期招へい事業に参加し、我が家はホストファミリーとなった。日中関係は戦後最悪とまで言われ、中国人のマナーの悪さ等中国の負の側面も数多く報道されていた当時。中国に対する見方も否定的なものが多かった。ぼんやりとマスメディアの残像が目奥に残っていたからだろうか。私は友達に何も言い返すことができなかった。

しかし、それを変えたのが彼女だった。日本のアニメと漫画にハマり、日本大好きな彼女。流暢な日本語に温厚かつ律儀で明るい性格故に気づけば彼女を中国人としてではなく我が家の新しいお姉ちゃんとして周囲も受け入れていった。『なんとなく』抱かれていた中国に対する負の感情。でも、それは知らないからだった。知らないから、周りの情報を鵜呑みにしているだけだったのだ。周囲の中国に対する見方も徐々に好意的になっていった。勿論、文化や価値観、風習等の違いにより些細な衝突や問題は生じた。しかし、彼女と真摯に向き合い、話し合い、互いを尊重し合うことで乗り越えることができた。マスメディアでは見ることのない、日中間の友情と友好関係が芽吹き始めていた。

それから1年。帰国前、彼女はこう言った。

『小さな喜びより大きな幸せを求めていた。でも、日本に来て考えが変わった。今を犠牲にしなくていい。やりたいことがあればやればいい。いつか幸せになるんじゃないかっていつも幸せでいたい』と。中国では医者になるために彼女は名門進学校で寮生活をしてきた。熾烈な受験戦争故、1年間受験勉強から離れることに不安を抱えつつ彼女は日本に来た。実際、日本に留学して中国の大学進学に向けた受験勉強は遅れてしまったかもしれない。けれども、それ以上に日本での高校生活には価値があり、毎日が楽しくて仕方がなかったという。そして、日本での学びを上記のように振り返ったのだった。この言葉は今、私の人生観にもなっている。8年前の自分がかつての彼女のように未来の自分のために全力投球していた。目の前のことを蔑ろにしていた。今よりもっと良い未来を掴むために。でも、今を大切にすることの重要性を彼女から教えてもらった。彼女のお陰で素直に自分自身と向き合い、今に全力を尽くしている。

そして、この言葉は今後の日中関係にも言えることなのではないか。日本の戦争犯罪や領土問題等歴史や政治、外交等における様々な難題に直面している。これらは過去から現在に至る複雑な歴史的背景や思惑、感情等が絡み合い、混迷を極めていく。無論、これらの解決は最重要事項である。しかし、もう少し『今現在』を両国が知り、向き合う必要があるのではないかと私は考える。中国は日本の『今』を。日本は中国の『現在』を。8年前

の私のように隣国の真の『今』に無知なのだ。知らないからこそ負の感情が生じる。負の情報に踊らされる。だから、8年前の私たちのように『今』をお互いに『知る』のだ。知ることから相手を理解し、尊重することが始まる。今を大事にすることがより良い未来に繋がるのだ。

海を隔てた隣国。太古から互いに交流してきた。8年前の私と彼女は文化や風習、価値観の違いを1つずつ乗り越えていった。いつか冷え込んだ日中関係を改善するのではない。いつも互いを理解し、高め合えるアジアを牽引する両国であり続けるのだ。そのために相手を知ること、今を大切にすることが大事なのだ。そう、彼女が教えてくれた。今年、日中国交正常化50周年を迎える。まだ見ぬ中国。そんな中国の『今』をこの目で見て、知りたい。

たった一人の民間外交

(株)エイチティープランニング
インバウンド事業部・通訳翻訳事業部 課長
木村 吉貴

仕事、日中友好協会、柔道、留学経験、私は様々な分野にて中国とかかわりを持っている。そして中国には今でも私を温かく迎え入れてくれるかけがえのない友人たちが沢山いる。中国との付き合いは恐らくずっと人生を共にしていく課題なのだろうと考えている。

2019年が終わり、年明けの2020年1月。宮城県の招聘事業で武漢と広州の旅行会社の人たちが宮城県を訪れた。私は宮城県庁から誘いを受け、会食交流会に参加した。会食の場所は宮城県の特色を味わえる旧伊達伯爵邸・鐘景閣で行われた。一緒にお酒を交えながら、楽しいひと時を過ごすことが出来た。当時は今年も中国関連で一年が始まると考えていたが、その数か月後、中国全土、また世界中を悲劇が襲うとはこの時は想像もしていなかった。

それから数か月が過ぎ、中国国内では「原因不明の肺炎」が大流行していた。当時、何も危機感がなかった私は「対岸の火事」程度でそれを見ていた。しかしそれは瞬く間に中国全土を震撼させ、SNSの書き込みでも助けを求める投稿を目にした。私は居ても立っても居られなくなり、すぐに行動をした。県内各地を歩き回りマスク、消毒液、体温計などの物資を確保した。

最初に柔道仲間を助けたいと思い、かつての職場である日中友好青島柔道館と技術講習や大会で度々訪れていた日中友好南京柔道館と金華市柔道協会にマスクと体温計を送った。しかし個人で確保できる量はたかが知れている。そこで私は母校、東海大学柔道部の大先

輩でもある井上康生先生が理事を務める「JUDOs」に相談を持ち掛けた。そしてすぐに了承して頂き、「JUDOs」からも追加で沢山の支援物資を中国に送って頂くことになった。次は留学先でもあった延辺大学と地元延吉の友人たちへ支援物資を送った。こちらは延辺大学日本校友会の協力を取り次ぐことが出来、中国の母校へ物資を送り届けることが出来た。それから、仕事で付き合いのある大連市旅行発展交流促進委員会と1月に仙台で食事を共にした広州と武漢の旅行会社へ支援物資を届けた。物資を送る前に私は所属先の代表取締役と相談を持ち掛けた。代表取締役は快く承諾して下さい、会社名義で大連と武漢、広州に支援物資を届けることが出来た。後日談ではあるが、大連の旅行会社の方のSNSの書き込みで「日本のある青年の行動がとても感動した」との書き込みを見たときは涙が出るほど嬉しかったのを覚えている。また、大連に送った物資は市内の老人ホームなどに届けられたようだ。

それから月日が流れ、中国で感染状況が若干落ち着きを取り戻したころ、今度は日本で感染が拡大し、物資不足に悩んでいた。その際、大連旅行発展交流促進委員会から会社宛に大量の支援物資が届いた。届いた支援物資は会社を通じて仙台市内の小学校や石巻市、東松島市、女川町などの被災地寄付をした。そして日中友好青島柔道館からも支援物資が届き、それは私の母校でもある東海大学山形高校柔道部へ寄付をした。たった数か月の間に起きた出来事だったが、国や言語を超え、困っているときにお互いに手を指し伸ばすことが出来、お互いに友人を思う気持ちが今回の一連の出来事を成功させてくれたのだと思う。

本年は日中国交正常化50周年を迎える節目の年にもあたる。2月には縁があって中国大使館とのオンライン交流に参加し、発言する時間を頂いて私が心に秘めていたことを楊宇臨時大使に伝えた。以下発言した内容である。「中国語を勉強したい、中国へ留学したいという新しい目標を掲げた私は東日本大震災と病気を克服して2013年に中国に渡りました。当時の私にはいろいろな選択がありましたが、あの時の選択は私の誇りです。一つは皆の為、皆は一つの為。日中友好を心に掲げる私達若者世代が50周年という節目の年に永世に渡った友好関係の構築、相互発展、相互理解、相互学習を続けるとこの場を借りて誓いたい」

大学で出会った新しい中国

アメリカ創価大学
リベラルアーツ3年
佐藤 優菜

私はカリフォルニアにある大学で学んでいる。今年の3月、大学の休み期間を使い、友人とサンフランシスコへ出かけた。旅をする目的は、アメリカ最大級のチャイナタウンを訪れること。中華料理が大好きな私。大学で中国語を専攻している私。また、米国での生活で、食のギャップに苦しみ、少しでも日本食に近い料理を楽しみたい私。これらのことが相まって、チャイナタウンへの旅に心を躍らせていた。

食べ歩きをして早数時間。通りすがりの建物の「抗日」の2文字が目飛び込んできた。その建物は「海外抗日戦争記念館」であった。扉の中には、中国人の案内人が1人。日中戦争の対日抗戦を顕彰する目的のために建てられた建物である。完全に平和ボケをしていた私にはこの「抗日」の2文字が強烈だったことを今でも覚えている。チャイナタウンの食事には大満足したものの、この強烈な2文字に動揺しながら旅を終えた。

「抗日」の2文字。この2文字が目飛び込んでから、私の父や高校の社会科の先生から教わったことを思い出した。それは「戦争中に日本が中国に侵したこと」だ。当時、日本軍は身勝手に中国人の戦争捕虜や平民を殺したのだ。この事実を自分自身で改めて咀嚼するようになった。もちろん、日本も戦争中、あまりにも無惨な形でたくさんの尊い命を失った。胸が裂けるような事実である。しかし、戦争中のことに関して、日本の教育で教わるのは、「日本が被害者としての立場」であることが多いだろう。日本が他国に犯した罪、中国の方々に犯した戦争犯罪を意識して学ぶことができる時間は圧倒的に少ない。抗日、反中国という感情は、お互いの感情を受け止め、尊重することができていないが故に生まれるものだと思いついた。

終戦から77年。日中国交正常化から50年。中国と日本の関係は良好だと言えるのだろうか。中国人は敵と思う日本人も一定数いるのではないだろうか。地理的、経済的にも密接な関わりを持っている中国と日本。また、日本は中国からさまざまな文化的、歴史的恩恵をこうむっている。これらを踏まえると、現在の中国と日本の関係は正直悲しい事実であり、同時に変えていくべき事実でもある。

私も大学に進学するまでは、上記で述べた「一定数いる日本人」のうちの1人であった。おそらく幼い頃から目にしていたメディアを鵜呑みにしていたからである。

しかし、大学生活によって、私が抱く中国人に対するイメージが変わった。大学では中国から来た友達も作ることができた。彼らとの楽しい食事の時間。親身になって中国語を教えてくれる彼らの姿。私がそれまで抱いていた中国人に対するイメージが変わった。また、それと同時に、特定の側面からだけで中国人を判断していた自分自身の視野の狭さを認識した。

大学生活で感じた、私たち学生の無限大の力、そして、1対1の関係の大切さ。きっと中

国人に対して負のイメージを持っている日本人の学生もいるであろう。もしかすると、特定の面から中国人を捉えているのかもしれない。だからこそ、大学生活で出会う中国人、または中国に対する大学での学びを大切にしてほしい。この、自分対 1 人の中国人、自分対 1 つの中国の学びが身近な人に伝わり、それが波及効果となってよりスケールの大きい物事への良い影響力になる。学生こそ、この波及効果の起点としての役割を担うことができるのだ。

最後に、私が今、日中関係向上のために果たせる使命とは何なのか。それは、大学で学んでいることを活かすことである。米国の大学生として日々多様なバックグラウンドを持つ友人と授業を受け、また、日常生活を送ることで、かけがえのない学びを得ることができた。相手の価値観を受け入れる力。傾聴力。コミュニケーション力。これらの力を日中交流の場や日中関係向上のためにも反映していくという使命を全うしたい。

音楽を架け橋に

桐朋学園大学
音楽学部 4 年
佐伯 茜

私は日本の音楽大学でピアノと音楽学を学ぶ 4 年生。そして、とにかく中国について知ることが大好き。

小さい頃からピアノ一筋だった私に「中国」という新しい興味をもたらしたのは、大学 2 年生の時に観た中国の時代劇ドラマだった。そのドラマにはファンタジー要素もあり、美しい衣装に身を包んだ登場人物たちが空を舞いながら仙術を操る姿に、一瞬で心を奪われた。

それまで「時代劇」といえば、「祖父母の家に行くとテレビで流れていて、なんだか渋い」というようなイメージしかなかった私だが、その固定観念すら覆された。ファンタジー要素による壮大なストーリーと表現方法が、舞台セット・音楽・衣装などに散りばめられた伝統要素をより魅力的にみせていて、毎日ピアノの鍵盤と向き合うばかりであった日本の音大生をも夢中にさせてしまったのである。

中国の人は伝統文化を風化させずに現代に落とし込んで楽しむ、ということにも長けているのだなあと感じた。

ドラマをきっかけに中国についてもっと知りたいと思い、まずは中国語の勉強を始めた。今では中国の地図を部屋の壁に貼って思いを馳せながら、伝統文化についての本を読んだり、中国のテレビ番組をチェックしたりする日々である。

そんなこんなですっかり中国に夢中になった私は大学4年生となり、卒業論文に取り組む時期がやってきた。音楽学を専攻しているので、テーマは音楽に関連することから選ぶのは鉄則だった。

どんなテーマで書こうかと考えながら、ふらりと立ち寄った中国関連書籍を扱う書店の古書コーナーで、一冊の本に目を引かれた。榎本泰子さんという日本の音楽学者が書いた、「楽人の都・上海—近代中国における西洋音楽の受容」という書籍である。タイトルを見て、日本のクラシック音楽受容については大学で学んだことがあったが、中国ではどのようにクラシック音楽が広まっていったのだろうと興味をかき立てられた。同時に、「中国におけるクラシック音楽受容」というテーマは、音大生であり、かつ中国に強い関心を抱く私にぴったりなのではないか?と思い、自分なりに調べてみることにした。

調べを進めるうちに、中国におけるクラシック音楽受容には、日本との関わりの深い出来事もたくさんあることを発見した。例えば、中国での音楽教育の発展に尽力した人物である沈心工には日本留学の経験があり、鈴木米次郎という日本の音楽教師との交流があったという。音楽を通じた先人たちの日中交流の痕跡に胸が熱くなった。他にも日本との関連を探してみたら面白い卒業論文になるのではないかと思い、比較したり、共通点を探してみたりして執筆を続けている。

研究対象としている中には戦争の暗雲が立ち込める時代も含まれており、資料を読んで心を痛めることもある。しかし目を背けずにまずは歴史を知り、受け止めることが重要と考え、卒業論文はその貴重な機会でもあると思って取り組んでいる。

自分が今まで取り組んできたクラシック音楽と大好きな中国を結びつけることで、新しい視点で音楽について考えることができた。日本の音楽大学の学生は、やはり本場ヨーロッパへの関心が強く、勉強する言語や留学先もそれらの国々を選ぶ人が多い。しかし少し視点を変えて、同じアジアの国同士である「日本と中国」という観点からもクラシック音楽を見てみると新たな可能性が広がるということも、卒業論文を完成させることで示せたらいいと思う。あの時に観た中国ドラマは、私にそんな使命を抱かせるに至った。

私が中国に興味を持ち、その地を踏んでみたいと強く思った頃にはすでに新型コロナウイルスの流行によって道が閉ざされていた。いつかは必ず中国に赴いて、自分の目で見て、聞いて、中国のことをもっと深く理解したい。沈心工と鈴木米次郎のように「音楽」を架け橋とした日中交流を目指すことが、次なる私の目標である。

私の真っ赤な口紅

神戸大学

国際人間科学部 子ども教育学科 4年

羽瀬 彩乃

「中国から留学生が来ます」

ゼミの先生はその言葉に、私の胸は高鳴った。「大学では沢山の留学生と交流したい」と意気込んで入学したものの、大学 2 年目の春以降、新型コロナウイルスの感染拡大によって、私の願いは呆気なく打ち砕かれていたからだ。自宅でのリモート授業が続き、留学生はおろか、同級生とも対面で会うことができない毎日。そんな日々が約 2 年間続いた。留学生がゼミに来ると知ったのは、私が 4 年生になり、やっと対面授業に参加できるようになったタイミングのことであった。

中国からの留学生・徐さんと私が仲良くなるのに、時間はかからなかった。大学からの帰り道、一緒にバスに乗って話すうちに、多くの共通点が見つかって話が盛り上がったのだ。犬を飼っていること、自然や動物が大好きなこと、今後の大学での目標——。「メイクに興味がある」というのも共通点の 1 つだった。

ただ私は、メイクに興味はあるものの、詳しいことはよく分からなかった。大学 1 年生の頃は目の前の大学生活や勉強に必死で、メイクにまで気が回らなかった。「2 年生からは、少しずつメイクを楽しめたら」と淡い期待を抱いていたものの、コロナで自粛を強いられたことで、コスメを買いに行くことも、実際にお店で試してみることも難しくなった。外出が制限され、人と会う機会が激減してしまったことも加わって、私はいつの間にか、メイクに対する好奇心を失っていた。

私は、そうした自分の状況を徐さんに伝えた。すると徐さんは、おすすめのコスメや中国で人気のメイク動画をスマートフォンで見せてくれた。私は中国の華やかなメイク文化にワクワクした。中でも心躍ったのは、美しい口紅の数々だ。「赤色」と一口に言っても、オレンジがかった夕焼けのような赤色から、散る前の紅葉を思わせる渋い赤色まで、まさに千差万別だ。

「口紅の色が僅かに違うだけで、メイク全体の印象が随分変わって見えるね」

驚く私の様子を見て、徐さんは「少し早めの羽瀬ちゃんへの誕生日プレゼントとして、一緒に口紅を買いに行こう」と提案してくれた。

口紅を買いに行く日、私たちはコロナの感染対策を十分に講じたうえで待ち合わせた。徐さんは、私をデパートの化粧品売り場に連れて行ってってくれた。それまで横を通り過ぎることはあっても、立ち止まってじっくりと商品を見たことはなかった。私にとって初めてのコスメカウンター。数えきれないほどのアイシャドウやファンデーションといった化粧品が並んでいる。上品な香水が立ち込める、キラキラとした華やかな空間に、私は圧倒されていた。

徐さんが勧めてくれた化粧品ブランドのコスメカウンターに到着すると、私はその口紅

の種類豊富さに目が回りそうになった。

「どの口紅が良いかなんて、私に分かるのかな」

些か不安を感じていたその時、私はハッとした。徐さんは事前に、どの口紅が私に似合いそうか調べてきてくれていたのだ。

口紅のテスターが、次々と私の手の甲に並んでいく。

「163番と288番の口紅はありますか」「羽瀬ちゃんには、どれが一番似合うかな」

そう話す徐さんの隣で、私は胸がいっぱいになった。それは、初めてコスメカウンターに来たときめきに因るものでも、自分に似合う口紅を見つけたいという高揚感に因るものでもない。徐さんが私のために、あらかじめ情報を集めて、店員さんと相談しながら一生懸命に考えてくれている姿に因るものだった。私は悩んだ末に、徐さんと店員さんが勧めてくれた、真っ赤な口紅を選んだ。

誰かを大切に想う気持ちに国境はない。徐さんとの出会いを通じて、私が学んだことである。徐さんの留學生活は、まだ始まったばかりだ。これから一緒に日本での思い出を沢山作りたいと思っている。そしてコロナが終息したら、いつか徐さんの故郷である中国に行ってみたい。徐さんがプレゼントしてくれた真っ赤な口紅をつけて、人を大切に想う気持ちを抱きながら――。

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2022」

★入賞

敦煌

近畿大学

国際学部 国際学科東アジア専攻中国語コース4年

徳永 潤

2021年7月、かつてシルクロードの重要拠点として栄えた歴史あるこの地に、いまは一人の日本人が立っている。彼が目指す鳴沙山が歪んで見えるのは暑さのせいだろうか。眼前に広がる白い砂漠は、空の一番高いところから照り付ける太陽をこれでもかと反射している。

「好热，好烫，热死了（暑い、熱い、死ぬ）」

独り呟きながら額に張り付く前髪をかき上げて、首を伝う汗をタオルで拭いた。気分を変えたくてぬるい水を口に含んでみるが、これもすぐに汗になるだろうと思った。北京で友人から貰った白いサンダルが、きらりと足元で光っている。ちんちんに熱せられた砂は簡単に足を放してくれないが、それでも一歩ずつ歩を進める。あの砂山を登った先に何かあると期待しているが、どうせ見えるのは少し遠くの、同じような砂漠だろうともわかっていた。

当時の私は大学を休学し、北京で働いていた。「将来の進路をゆっくり考えたい」という理由から、休学してまで一時的な就業を選んだ。与えられた期間は2年間。十分すぎる時間だと思っていた。しかし、光陰矢の如し。任期が残り2ヵ月となった時点で、全く答えが出ていなかった。焦り始めた私は、旅先に答えを求めた。敦煌を選んだのは、井上靖の『敦煌』を愛読していたのと、砂漠という非日常に惹かれたからだ。こうして私は「進むべき道」を探しに敦煌へやってきたのである。

あの砂山の頂上に、答えの書かれた紙が入った宝箱でも置いてあれば、活力も戻るのかな。歩く理由を必死に考えて、出て来た答えはむなしかった。ふと横を、ラクダを連れておじさんが通り過ぎて行った。ラクダはゆっくりとした足取りで、颯爽と砂漠を闊歩している。かっこいいと思った。動物は苦手だったが、何事も経験と思い、100元を払って乗せてもらった。そして私は、ある発見をする。

「高い——それに、涼しい」

ほんの数秒で地面が急に遠くなった。ラクダの高さ分空に近づいただけで、心地よい風も感じるようになった。全身から噴き出していた汗も少し冷え、熱気に支配されていた頭

も冷静さを取り戻した。

「なんでこんなに気持ちいいのだろう？」

今度は日本語で呟いた。そして、地面にいたときよりも、世界が広がっているのに気づいた。足元の砂とにらめっこしていた私は、この地の本当の姿が実は見えていなかったようだ。砂漠は地平線の先まで続いている。空は雲一つない快晴だ。観光客はこんなにいたのか。すべてが発見だった。

そして、この地に来た理由を改めて考えてみた。私は「進むべき道」という答えを出すことに焦って、自分らしさを見失っていたのかもしれない。これまでを振り返っても、常に明確なゴールはなかった。ただひたすら、その時にベストと思える選択をしてここまで来たではないか。子供の頃に思い描いていた未来とはだいぶかけ離れたいまを生きているが、中国との出会いをきっかけに私は人生を取り戻せた気がする。砂漠に残る足跡のように、中国で出会った人、中国での経験、中国を通して考えた日中の未来、すべてが私の心に刻まれている。

「これからも、中国と共に歩いていきたい」

砂漠で一人、心からそう思った。

ついに、鳴沙山の頂上に着いた。最後は自分の力で登りたいと思って、途中でラクダを降りた。頂上に宝箱を見つけることはできなかったが、心の中にコンパスを手に入れた気分だった。焦る気持ちはもうない。

「自分らしく、人のために、一歩ずつ」

私のコンパスが指す方向に、自分の幸せだけでなく、日中友好もあると確信している。ラクダに乗っただけで、随分と大事な気づきを得ることができた。しかし、敦煌に来なければずっと気づけなかったかもしれない。砂漠に沈む夕陽を背に、赤い砂の斜面を勢いよく駆け下りた。サンダルの友人にも早く伝えたい。

「今までありがとう。僕は、もう大丈夫」

砂にもつれながらも、足取りは軽かった。北京までも飛んでいけそうな気分だった。

中国の優しさに救われた

都立中央図書館

岡部 達美

私は、東京に住んでいる。でも、たまに都会暮らしに疲れることがある。そんな時、私は決まって、京都府宇治市にある萬福寺を訪れる。

萬福寺は、日本では珍しい黄檗宗のお寺である。江戸時代初期、中国福建省から来日した隠元禪師によって開かれた。

私は、高校3年生の時、お寺のお坊さんから、次のような話を伺ったことがある。「隠元禪師がこの寺を開いたのは、70歳の時です。江戸時代の70歳は、高齢そのものです。しかも、禪師を呼んだのは、長崎の逸然という僧侶ですが、最初は、也嬾（やらん）という禪師の弟子を呼んだのです。ところが、也嬾の乗った船が難破し、亡くなってしまいました。禪師は、志半ばで亡くなった弟子を考え、その遺志を果たすため、危険も顧みず渡来したのです。」

私は、隠元というひとりの中国人の僧侶の大きな心に心打たれた。「隠元禪師は、僧侶と言うより仏様だわ。」

私が萬福寺を参詣する一番の目当ては、『布袋尊』にお目にかかることである。布袋様は、本堂の前にある天王殿の正面に祀られている。実は、この布袋様は、弥勒菩薩様の化身である。でも、この菩薩様は、世に知られた弥勒菩薩とは、お姿がかなり違う。一般に、弥勒様は、右足を曲げて左膝の上に乗せ、右手の指を頬に当て、ロダンの『考える人』が浮かんでくるような、物思いにふけるお姿をしている。「どうしたら、困っている人々を救えるだろうか。」と、思案なさるお姿に見える。

ところが、萬福寺の布袋様は、ほんのり染まる頬、タレ目が印象的である。また、ぽってり丸い太鼓腹、大きな袋を片手に片膝を立てて座り、体は黄金色に染まっている。そして、大きな口で笑いながら出迎えてくれる。

去年の冬、私は、また、萬福寺を訪れていた。その時、思い切って、お坊さんに尋ねた。「どうして、この菩薩様は、仏様というより人間に近いお姿なのですか。」

お坊さんは、おっしゃった。

「実は、布袋尊は、唐代末から五代時代にかけて、中国・明州、現・浙江省に実在した、契此（けいし）という僧侶のお姿なのです。」

このお坊様は、大きな袋、頭陀袋（ずだぶくろ）を抱えて国中を旅していました。そして、旅先で出会った貧しい人々に、持っている袋の中から必要な物をお与えになったのです。時が巡ると、今度は、お坊様に救われた人々からお礼をいただくようになりました。お坊様は、いただいた品物をまた袋の中に入れ、再び行脚の旅に出ました。こうして、袋は、どんどん大きくなっていきました。」

私は、布袋様の袋の中身が、感謝と慈悲の心であふれていることを、この時、初めて知った。

顧みると、隠元禪師は、中国から日本に、様々な物をもたらしたと言われている。隠元豆、西瓜、蓮根、孟宗竹（タケノコ）、煎茶に始まって、印刷、建築、美術まで、多岐にわたる。しかし、それらは、どれひとつ取ってみても、その後の我が国の人々の生活に恵みをもたらさなかったものは無い。否、それらのおかげで、また、新たな文化が築かれていったと思う。農業、料理、経済、建設等、発展の基礎をいただいた産業は多い。

私は、この時、もうひとつ、気づいたことがある。それは、隠元禪師も、布袋尊の化身だったのではないかということである。禪師は、さまざまな思い、知識、そして、品物を、

袋に入れ、日本においでになったのではないだろうか。見えない袋だったかも知れない。しかし、その袋に、日本の人々を幸せにしないものは何一つなかったことだけは、間違いないと思う。

私は、萬福寺の布袋尊は、隠元禪師の化身だと思っている。禪師は、どんな時でも、どんな人も笑顔で迎えてくださる。こぼれるような笑顔で、悲しみや疲れにおののいている人々に、優しく接してくださる。

私は、そんな布袋様が大好きなのだ。隠元禪師の大きな心に触れられるようで、それだけで、幸せになれる。私は、強くなれるのである。

変わる中国、変わらない中国

早稲田大学
文学部 中国語中国文学コース 2年
高宮 ゆり子

今から7年前の2015年春、私は初めて中国を訪れた。観光ではない。結婚式のためだ。無愛想で偏屈で、結婚の気配なんてないと思っていた叔父が、いつの間にか若くて可愛い中国人留学生と出会い、彼女の故郷で式を挙げることになったのである。家族で海外旅行などしたことがなかった私たちは、胸を踊らせると同時に、未知なる国への不安を抱いていた。ちょうど、その年の流行語大賞には「爆買い」が選ばれている。中国から訪れた観光客の大きな声や奔放な振る舞いは、秩序を重んじる日本の社会に馴染まず、冷たい視線を送る日本人も少なくなかった。私たちも、多かれ少なかれそのような偏見を抱いていたといえよう。それでも、大事な家族の結婚式ということで、覚悟を決めて中国に旅立ったのである。

さて、上海の空港に降り立ち、最初に私たちを驚かせたのはタクシーだった。これが怖いものなあって、床が今にも抜けそうなほどオンボロなのに、高速道路を猛スピードで走る。右に左に追い抜き競争、鳴りっぱなしのクラクション、ぶつかりそうな車間距離、アクション映画でも息を呑むようなシーンの連続に、当時小学生の私はぶるぶる震えて、本気で死を覚悟した。

なんとか生き長らえて翌日向かった先は、四川省瀘州市の叙永県というところである。上海や成都といった都会とは違って、数階建ての集合住宅が立ち並び、少し外れると山があるような地方の街だ。それでも、各所で高層マンションに建て替わる動きが見られ、その開発工事のせいか、はたまた中国特有の大気汚染によるものか、街全体が咳き込みそうなくらい埃っぽかった。

そうしてついに、結婚式の日を迎えた。式場の前には、まるで芸能人かと思うような新郎新婦の等身大パネルやポスターが飾られ、大勢の親戚や知人のほかに、偶然通りかかった人までもが覗きに来る盛況ぶりである。テーブルには中華料理の大皿が次々と運ばれてきて、手をつける間もなく2、3段に積み重ねられた。「こんな量はとても食べきれない」とお嫁さんに告げると、「食べきれないくらい料理を出して客が残すのが、もてなしの意味なのだ」と教えてくれた。式が終わった後、大量に余った料理が躊躇なくポリ袋に棄てられているのを見て、複雑な気持ちになったものだ。

生活で一番困ったのはトイレである。仕切りのないニーハオトイレがほとんどで、紙も流せず、日本の温かい便座とウォシュレットに慣れた身にはかなりのストレスだった。他にも、アヒルの水掻きや牛の胃袋といった珍味を食べるなど、日本人の固定観念をひっくり返すような体験を一通り済ませて、私たちは帰国した。

これが、私と中国との衝撃的な出会いである。

あれから7年。中国経済のめざましい成長や急速な社会の変化には、驚かされるばかりである。叙永県では今ごろ高層マンションが建ち、さらなる開発が進んでいるだろう。トイレは海外からの観光客に対応するために洋式化が進んでいるというし、大気汚染や交通事情も、規制が厳しくなって大幅に改善されているそうだ。2021年には食べ残しを禁止する「反食品浪費法」が可決されたから、あの結婚式の光景はもう見られないかもしれない。2015年に私が見た中国は、すっかり変わっているに違いない。

しかし、一つだけ変わらないものがあると信じている。それは、中国の人々だ。現地で私たちを出迎えてくれた中国人は、想像していたよりもずっと親切で温かかった。親戚や店の人は、日本人の私たちに冷たい目を向けることなく、四川語とボディランゲージで積極的に私たちにコミュニケーションを図って歓迎してくれた。どんなに社会が変わっても、明るくて人情深い中国人の本質は変わらないだろう。

思いを巡らせていたら、もう一度街や人に会いたくなった。百聞は一見に如かず。情勢が落ちついたら再び中国を訪れ、この目で確かめたいものである。

私の大切に大好きな国、中国

共立女子高等学校 2年

赤松 桜花

「中国ってどんな国？」

と急に聞かれたら皆さんはどう答えますか。ある人は万里の長城がある国と答えるかもしれません。また、ある人は高い技術力を持つ国と答えるかもしれません。私は迷いなくこれまでもこれからも大好きな国だと答えます。

私は小学校一年生から四年生までの四年間を中国の上海で過ごしました。

一年生になる春休みに胸が躍るような楽しい気持ちを抱えて母と一緒に一足先に上海に住んでいた父の元へ向かいました。飛行機から降りて手荷物受取口に着いたら周りの皆が中国語を話していることに気がつきました。幼かった私は外国で暮らすということを急に実感して不安になり涙が止まりませんでした。すると空港で働いている従業員の方や乗客の方が私に話しかけ慰めてくださいました。言葉は分からなかったけど安心しました。この後から不安を一度も感じず過ごせました。

私が上海で電車やバスに乗った時、両親とはもちろん日本語で話していました。だから他の乗客の方は私達が日本人だと分かったと思います。しかし日本人だということを気にせず子供だからと言って席を譲ってくださいったり話しかけてくださったりしました。また、簡単な中国語しか話せない私に中国語が上手だと褒めてくださる人が多くて自分に自信がつかしました。

日本では恥ずかしくて泣いている子供を慰めたり席を譲ったり人を褒めたりする人が少ないです。でも、中国では皆が普通の行動として日常的にやっていました。私は中国の方々のこの様な行動に何度も喜び何度も助けられました。だから私も少し恥ずかしいけれど見習って行動するようにしています。中国で暮らした四年間は楽しくて幸せただけでなく沢山の事を学んだ貴重な時間でした。

私が友達などに中国に住んでいた事を話すと中国が嫌い、中国人が嫌いなどと言われることがあります。そのたびになぜ嫌うのかが分からなくて辛くなります。また、中国でも日本人だと分かたら冷たくなってしまう方が少なからず居ました。当時はどうして分かりませんでした。けれど年月がたって過去に日本が中国の方々に対して許されない残虐な行為をしていたのかを学びました。申し訳ないと感じると同時に過去の歴史は変えられないと思うと辛くなります。中国にも日本にも互いの国を嫌いな人がいる事は事実です。

「嫌い」の感情を「好き」にするのは難しいかもしれません。だから少しでも良い所や素敵な所を見つけられると良いと思います。このために私に出来ることは日本人に中国や中国の人々の良さを伝えることなのでめげずに頑張ろうと決心しています。

今年 2022 年は中国と日本が国交を結んでからちょうど 50 年になります。今、私は 16 歳で将来のことは分からないし考えるのは怖いとさえ感じています。ただ一つ心に決めているのは、どんな形だとしても私の大切に大好きな国である中国と関わって生きるというこ

とです。この目標を達成するために日々中国語の勉強を怠らず中国で学んだことを胸に刻んで生活します。

変わらないもの、変えてくれたこと

株式会社小学館
葛 里華

おかずが足りなければ開口一番「塩卵」。夏はとにかく西瓜三昧。大好物はひまわりの種。

私にとって、父と暮らす生活は、毎日が異文化交流の日々だった。

19歳の時、留学生として父は日本にやってきた。父は母と出会って結婚し、私が産まれた。幼い頃、私は父が中国人であることをよくわかっておらず、「私の家族はやけに中国に行くなあ」とのほほんと思っていた。

だからと言っていいかはわからないが、幼い頃から、私は正直、父のことがよくわからなかった。理解に苦しんだ、という言い方のほうが合っているかもしれない。

「怒っていない」と言いながら、ものすごく大きな声で話すし、語尾が強いし、人に「すみません」というと「謝るな」と怒られるし、謝らないと「調子に乗るな」と怒られる。父はとにかく教育に熱心で、いつも私の成績を気にし、口うるさく勉強しろと言っていた。こんな調子だから、父と私は物心ついた頃から口喧嘩ばかりしていた。

ある日、母から「これ読んでみて」と一冊の本を渡された。

それは、父と共に日本にやってきた留学生仲間たちの文集だった。

そこには、当時の私と同じ19歳の時の父の日記が載っていた。

ページをめくる度、私の知らない父の姿が浮かび上がってくる。日本のことをよくわからずに中国からやってきて、同級生たちと親元離れて勉強に励む父の姿。

中でも印象的だったのは「今日、面白い遊びを発見した」という日記だった。

「僕が“つくえ”と言い、次に単語の終わりの言葉から始まる言葉を言います。この場合は“えんぴつ”が正解です。これは、単語を覚えるのにとってもいい遊びです」という内容だった。

きっと、かつての父にとっての日本こそ、毎日が異文化交流だったのだろう。

この文章を読んだ時、父が事あるごとによく私に言っていた中国語の意味が頭の中に浮かび上がってきた。

「好好学习 天天向上」。よく学び、絶えず進歩せよ。

父が学生の頃、中国はまだまだ貧しかった。
勉学に励んだことで、日本に留学に来られて、職業の幅に恵まれたと言っていた。
文集には、父含め留学生の人たちの“今”も描かれていた。
父は私と弟との写真を載せており“家族ができて幸せだ”と書いてくれていた。
19歳の私は、父の“強さ”に打ちひしがれた。
私には、父のように一人で孤高に勉学に励むほどの強さがあるだろうか。
父の姿を理解しようとしていなかった。そう思い、私は父の故郷・中国について学ぶことにした。中国の文化を知るために、中国語を学び、中国のドラマを観るようにした。
すると、怒っていると思っていた父の語尾などは、彼らの文化の一つであることがわかった。
家族思いで、何事も諦めない中国の人々のことを知る度に、父の私への態度の理由が紐解かれていくのを感じた。
今では私は父と中国語で会話するようにしている。
そうすることで、父のことが少しだけ理解できるようになった気がする。

私たち家族は、中国に帰ると必ず立ち寄る場所がある。
浙江省寧波市。父が生まれ育った街であり、父の両親、私のための祖父母・アヤとアニャのお墓がある場所。
幼い頃から行く場所だが、お墓に行く道中はこの10年で見違えるほど変わった。
最先端の街並みにたかが10年で変わるなんて、当時は思いもよらなかったが、父から教えてもらった、中国の人々の不屈の精神を考えると驚かない自分もいる。
ただ同時に、昔のような深い緑に囲まれた中国の街並みを懐かしいと思う自分もいる。
変わらないものはないのかもしれない。
物事も人も、変わり続けるものであるということはわかっている。
けれど、いつまでも脈々と受け継がれている「変わらないもの」は確かに存在する。
それこそが「文化」だと思う。
中国の人たちの強さ、明るさ、諦めない心。
「好好学习 天天向上」が彼らの中には脈々と受け継がれていると、日々発展する中国を見てしみじみ思う。
私もこの精神を受け継ぎ、何事も前を向いて生きていきたい。

太極拳外交

尾崎 純一郎

私には今、夢中になっているものがある。それは、太極拳だ。皆さんも一度はテレビや映画などで目にしたことがあるだろう。太極拳は、陰陽の思想や中国古代の「導引法」「吐納法」を結合させることによって出来上がった武術で、現在は健康体操としての側面も持ち、世界中の老若男女に親しまれている。私は太極拳を始めて今年で10年目になる。趣味の一環として始めたものが、今では私の生活になくてはならないものとなっている。

太極拳との出会いは、大学1年生の時。私は中国の歴史や文化に興味があり、大学から中国語を専攻した。そして1年生の秋、北京に半年間、語学留学した。ある日、私は近くの公園へ散歩に出かけた。中国の公園は日本と比べたくさんの人が訪れていて、活気に満ち溢れていた。私はそこで太極拳を練習している一団を見つけた。彼らはお揃いの表演服を着て、熱心に練習に励んでいた。その動きは川の流れの如くゆったりとしていて、まるで一つの芸術作品のようだった。さらに彼らの空間は、周りものとは対照的に静寂な空気に包まれていた。私は生で太極拳を見るのは初めてで、そこから太極拳に興味を持ち始め、自分でも習ってみたいと思った。しかし、留学中にはその機会は訪れなかった。

留学から帰国後、すぐにその機会は訪れた。なぜなら母が太極拳を学んでいたからだ。私が太極拳を習いたいことを知った母は、そのことを先生に相談してくれた。先生は、友人が通っている教室を紹介してくれた。私はすぐ入会を決めた。

私は先生から24式太極拳を学んだ。入門者はまずこの24式を習う。私は7年間、少林寺拳法をやった経験があるので、24式の套路（型）を覚えるのにそれほど時間はかからなかった。しかし、体や力の使い方などは、それまでやってきたものと全く違っていった。動きはゆっくりで一見簡単そうに見えるが、全身の協調が必要で、力も極力抜くことが求められる。当初は、すぐ力んで肩が上がってしまい、動きもロボットのようにぎこちなかった。逆に力を抜きすぎると萎えてしまう。私の動きは中国の公園で見た彼らのものには遠く及ばなかった。先生からは毎回中国語で「放松！（リラックス！）」と注意され続けた。そこから私は日々努力を重ね、練習日以外の時間も自宅や公園で自主練に励んだ。その結果、徐々に動きの中にもなめらかさが生まれ、先生からも褒められるようになった。少しずつ上達を実感した私は、既に太極拳に夢中になっていた。

教室の練習以外にもこれまで様々なことを経験してきた。中でも北京での太極拳研修旅行に参加したことは忘れられない。教室では例年、北京の什刹海体育学校を訪れ、中国人の老师から直接指導を受けられる研修旅行があった。当時私の拳歴は浅かったが、中国語ができるという理由でメンバーに抜擢され、そこでは通訳も担当した。これまで通訳の経験はなく不安だったが、学んできた中国語をフル活用し、老师の言葉をしっかりとメンバーに伝えることに努めた。そこでの老师のある言葉が印象に残っている。それは「本物の太極拳を体得するには、ただ套路（型）をやるだけでなく、太極拳の拳論や歴史、中医学なども学び理解しなくてはならない」というものだった。その言葉に感銘を受けた私は、

套路（型）の他にも独自に太極拳について研究を始めた。日本で手に入らない本や資料については、中国から取り寄せた。そして、太極拳が中国の哲学や中医学と深く結びついていることを知り、さらに歴史や拳論など、太極拳に関するあらゆる知識を吸収することができた。

私には、今大きな目標がある。それは「太極拳を通じて日中友好に貢献する」ことだ。私は将来、指導者として自身の教室を持ち、多くの人に太極拳のすばらしさを伝え、その普及や発展に努めたい。さらに太極拳を通じて「ピンポン外交」ならぬ「太極拳外交」で日中友好にも貢献したい。

友誼地久天長（友情は長い）

志學館大学
人間関係学部 人間文化学科 3年
山下真奈

閉店間際にお店にいる度に、2017年の秋、中国での一週間を思い出す。なぜかという、私たちが日本で閉店間際によく聞く曲である「蛍の光」は、中国語で「友誼地久天長」で、中国において友情の歌であり、中国の友人たちが私たちに贈ってくれたからである。私は、高校一年生の秋に、「青少年の翼事業」で、中国に一週間滞在した。その事業は、鹿児島市が、友好都市である「長沙市」との交流のために、鹿児島市の高校生を派遣し、現地の青少年との交流を図り、中国文化に対する知識を深めるためのものである。この訪中は、私にとって初めての海外渡航であった。正直、恥ずかしながら、当時の私は、中国という国に惹かれたのではなく、海外に行くことができるという部分に魅力を感じたために、参加を決意した。なので、中国に対しての知識は全くと言っていいほど皆無であった。私が中国に行くという話をするたびに、心配されることが多かった。これは、当時日本人の多くが、中国という国に対してあまりよい印象を抱いていなかったことが顕著に見受けられる。しかし、実際に足を運んだ私は、中国の魅力に圧倒された。まず、上海浦東空港に到着し、鹿児島の小規模な空港から乗ってきた私たちを圧倒したのは、とても広い敷地である。何もかもが広大で、とても感動したのを今でも覚えている。次に、中国のオンライン活用のスピード感にもとても驚いた。当時の日本はまだキャッシュレス決済はあまり一般的ではなかったが、すでに中国では多くの店に決済用のQRコードがあり、私のホストマザーも利用していた。そして、なによりも中国の友人たちの寛大さである。正直、あまり日本人が歓迎されることはないのではないかと、少し不安に思っていた。しかし、その一週間出会った中国の方々には皆優しく歓迎してくださり、中国のおもてなし文化は素晴らし

かった。食事の席でよそってくださいたり、上海でのバスガイドさんは、食事をあまり食べていなかった私に気づき、差し入れをくださったりした。このように、中国の良いところを数えきれないほど知り、中国が大好きになって帰国した。それからは、中国の出来事に敏感になり、中国文化を積極的に調べたりした。そんな私も大学生になり、第二外国語は中国語を履修、中国関連の授業はできるだけ履修した。その中で、第二次世界大戦についての授業で、日本と中国の、決して忘れてはならないであろう出来事を深く知った。もちろん、ある程度何があったか大まかな項目としては知っていたが、大学のより深く追及する講義の中で、日本人兵が中国という地で何を行ってきたかを事細かに学んだ。七夕が中国人にとって反日感情を掻き立てる日だということも衝撃であった。中国が大好きな私にとって、このような歴史を知らずして中国に行き、中国の方々と交流してしまったということに対して、とても後悔の念を抱いた。もちろん過去の出来事である以上、その当時の悲しい事実を変えることはできないし、その当時を知る高齢の方々が、互いに嫌悪感を抱くのは自然なことであると思う。私たち若者は、まずはその事実を両国の観点から客観的に知り、その事実を忘れないよう継承しつつ、相互理解を深め、新しいより良い関係を築いていくべきであると思った。今年で日中友好正常50周年を迎える。まだまだ政治的なしこりはあるものの、SNSを通じて出会うきっかけが増え、個人間の交流のカタチというものはより良いものになっているように感じる。中国・日本にマイナスイメージを抱いている人々も、その国の身近な友人ができることで、その国に対する興味関心は高くなるであろうし、知れば知るほどイメージは変わると思う。これから私たちが構築していく新しい時代では、過去の出来事も踏まえたうえで、国籍関係なく友好を深めていけるようなものにしたい。

日中で築くハーモニー

工学院大学
情報学部 情報デザイン学科4年
神田 真帆

「ドコドコジャー」

私がいつものように練習をしていたある日、部屋に中国人留学生が現れた。これが、私が中国に関心を持ったきっかけだった。

私は市民吹奏楽団に所属している大学4年生。担当はパーカッション。入団した理由の1つは、常任指揮者が中学の吹奏楽部でお世話になった先生だったからである。日本だけでなく中国など海外でも吹奏楽指導をしており、様々な国の吹奏楽事情に精通している。突

如現れた中国人留学生は、彼の紹介だった。好奇心旺盛な私は、信頼している先生の紹介というもあり積極的に話しかけた。留学生と仲良くなりたい思いと同時に中国に対して偏見があり、少し身構えていた。中国は競争が激しい社会であるので、気が強い人が多いという印象だったからだ。しかし彼はとてもおだやかで優しく、すぐに仲良くなれた。今では出会った時よりも日本語が上手になった彼と冗談を言い合えるほどコミュニケーションがスムーズになった。

彼は日本の吹奏楽文化を学び、自国で吹奏楽を広めたいという思いから日本に留学したと話してくれた。これまで日本の吹奏楽事情しか知らなかった私は、吹奏楽は全世界で当たり前にある文化だと思っていたが、実際は全く異なっていた。日本では、吹奏楽部がない学校の方が少ないくらい、広まっている。しかし中国では都会でも吹奏楽部の数は少なく、彼の出身地だと20分の1校ほどの割合だと言う。そのため、そもそも吹奏楽文化を知らないまま大人になる人も多く、彼も大学生になるまでほとんど知らなかったそうだ。これは、中国と日本の吹奏楽教育環境の差が深く関わっている。中国は日本に比べて学生の勉強の負担が大きく、課外活動をする余裕がない背景があった。近年は政策が変わり、課外活動の時間も確保する流れが生まれたため、この流れに乗って吹奏楽教育環境が改善されることを彼は期待しているそうだ。

彼と出会ってから私はとてもたくさんを知った。中国についてだけでなく、彼から話を聞くことで、日本についても知ることができた。日本の吹奏楽環境は中国から羨ましがられるほど整っていること。これには、学生生活の文化的な背景の差が関わっており、これから改善されつつあることを知った。しかし課題はまだある。彼は、金銭的な問題によって日本などへの留学ができずに、吹奏楽指導者の道を諦める人もいると言っていた。これを聞いて私は、日中の繋がりがもっと身近になれば、中国の吹奏楽環境の改善に貢献できるのではと思った。

ところで、私は大学で情報学を専攻している。そのため中国のICT化にも関心がある。中国の学生生活は勉強の負担が大きくと前述したが、人口が多く競争が激しい中国の環境を考えると自然であり、これが中国社会において大きな利益をもたらしているのも事実である。一例がまさにICT化である。日本は石橋を叩いて渡る国民性から、緻密さや丁寧さに定評がある。一方中国は、まずやってみるといふ国民性から、ビジネスの速度に定評があり、ICT化の発展はこのスピード感と相性が良かったのだろう。

人と人は助け合うものである。長所は活かし、短所は他の誰かの長所で補えば良い。これは国同士の関わりでも変わらない。日本の良さと中国の良さを合わせて互いに協力し合えば、吹奏楽文化は中国をはじめ全世界に広めることができると思うし、その他についても同様に、より良い方向へ共に進むことができると思う。私は中国人留学生と出会ったことで、吹奏楽文化を中国に広めるにはどうしたら良いか考える機会を得た。日中で協力して解決できる課題は、まだ気づけていないだけでたくさんあると思う。そのため、中国に実際に行って多くの人や文化に触れ、日本を見直し、様々な発見をしたい。隣接するこの2つの国がより良い関係を築くことで、お互いに成長できることを期待している。誰もが聴いて心地よいハーモニーのように。

言葉の力を信じて

株式会社テレビ東京
総合編成局アナウンス部
池谷 実悠

日本には「言霊」という考え方がある。「言葉」には神秘的な霊力が宿り、言葉の使い方次第で、未来も変わると考えられている。その「言霊」を信じて、アナウンサーの仕事の合間に、独学で中国語を勉強し始めて一年半。ついに目標としていた試験に合格した。

きっかけは大学4年生の時、卒論の資料収集で訪れた中国でのことだった。当時、私が中国に抱いていた印象は、幼いころにニュースで見た、反日デモの影響が強かった。人々が大通りで口々に日本企業への不満や、日本政府への批判を叫んでいた。中国語は分からなかったが、横断幕に書かれていた言葉の意味はすぐに理解できた。横断幕に真っ赤な字で書かれた「日本鬼子」という言葉は、それまで外国人といえば、日本好きで、日本人に友好的な人にしか出会ったことがなかった私にとって、かなりショッキングな出来事として記憶されていた。だから、中国行きは、正直に言うと、乗り気ではなかったし、行きの飛行機に乗るという時でさえ、「日本鬼子」という言葉が思い出されて、とても不安になったのを覚えている。

しかし、中国に着いて最初に乗ったタクシーで、私の不安は払しょくされた。運転手さんは、私の拙い中国語に一生懸命耳を傾け、私が話した何倍もの「言葉」を返してくれた。ほとんど聞き取れなかったが、その表情は、日本から歴史を学びに来た学生に、よく来てくれたといわんばかりだった。幸先よくスタートした一週間の旅の中で出会った人々は、まるで昔からの知り合いのように、皆、親切でおおらかだった。そして私を最も感動させたのは、「ようこそ中国へ。」「いい旅にしてね。」など、中国の人々が私にくれた、たくさんの温かい「言葉」だった。中でも、「日本人の若い子がよくここにきてくれた。」と、南京の本屋さんでかけられた一言は、幼いころテレビで見た「言葉」が原因で、不安を感じ、固まっていた私の心を、同じ「言葉」で安心させ、柔らかく溶かしていった。

初めての中国で、人々の温かさ、思いやりの深さを知り、あつという間に、私は、中国を愛する日本人になり、それと同時に「言霊」の強さを身をもって感じた。そして、中国の人々の「言霊」が、人と人が顔を合わせて、優しい気持ちで言葉を交わせば、憎しみは生まれないのだということを教えてくれた。

学生から社会人になり、テレビ局のアナウンサーとして働くようになってからは、多くの人に自分の想いを、自分の「言葉」で発信できる機会が増えた。番組内ではもちろん、公式のSNSアカウントで中国語講座の動画を配信したり、中華コスプレをしてみたり、北京五輪ではスタジオ進行を務め、少しでも日本の人々に、中国の本当の姿が伝わるように努力した。コロナ禍で中国に行くことが難しい今、私たちはSNS上で、中国の文化に触れ、直接会えずとも、言葉のやり取りをすることで互いに理解を深めあっている。最近では、中国インフルエンサー「ワンホン」のメイクが話題になったり、本格的な中華料理店であ

る「ガチ中華」が人気になったり、若者を中心に、少しずつ日中の心の距離が縮まっているように感じる。

そんな中、先日私の投稿に、幼いころ私を傷つけたあの言葉が返ってきた。今でも、時々そのような人に出会うこともある。しかし、もう私は負けたりはしない。

言葉一つで、誤解が生じ、互いに憎みあうこともある。しかし、私が中国で経験したように、言葉が、会話が、分かり合えないと思っていた人々を打ち解けさせ、互いに閉ざしていた扉を開ける鍵にもなるのだ。言葉は使い次第。

現地の人と、現地の言葉で、中国語で、会話をしたいという思いから、忙しい仕事の合間を見つけては、必死で勉強をして、目標とする試験に合格した今、私は「言霊」を、日本と中国の人々をつなげていく為に使いたいと思う。

人と人とが直接に知り合い、言葉を交わせば、憎しみは生まれれないのだから。

バイアスから脱却する第一歩

アクセント(株)
Strategy & Consulting
清水 美雪

「中国」と聞くとどんなイメージがあるだろうか。恥ずかしながら、私は無意識のうちに中国、中国人に対してネガティブなイメージを持っていた。それに気づかされた瞬間とそのイメージを払拭したのは、カナダ留学中の中国人の友達との出会いである。

大学1年生の時、英語を学ぶためにカナダのトロントに語学留学をした。語学学校ではヨーロッパ、アジア、中東、アフリカと様々な地域から学生が集まっていた。その最初のクラスで同じになった一人の女の子がいた。Karen という中国人の同じ年の女の子だった。

彼女と私はつたない英語であったが、仲良くなるのに時間はかからず、お互いの家族の話、学校の話、好きな人の話をするようになった。話せば話すほど、彼女はものすごく勉強熱心で向上心が高く、一人の人としてとても魅力がある人だと思い、尊敬していた。学校のクラスでもお互いを切磋琢磨するよきライバルであり、仲間であったように思う。また、彼女は日本のアニメが好きで、日本語を勉強していつか日本に来てみたいと私によく話していた。私はとても嬉しく思い、彼女が日本に来る際は絶対に案内するからね、と約束した。

3か月ほど経ち、彼女の中国への帰国が近づいて最後の思い出作りに彼女を含めた数人でアメリカに旅行に行った際、ある出来事が起こった。観光地のランドマークの写真を撮るためにできた行列に、中国人らしき人が割り込みしてきた。私はムッと来て「列の最後

は後ろです。みんな待っているの、あなたも並ぶ必要があります。」と伝えた。彼らは私の英語は聞こえないふりをして、列に並ぶことはなかった。その時、彼女は「ごめんね、中国人は失礼で…」と私に言ったのだ。私はその時、「あなたは中国人なのにすごく礼儀正しいし、とても優しいね。日本人の私にもすごく良くしてくれるし…」と言おうとしてハッとした。私が中国人に対して持っていたイメージは、礼儀正しくなくて日本人を嫌っている、というものだとして自分の中で気づいたのだ。自分の中に中国人に対する勝手なバイアスがあったのである。そもそも彼女が私に謝る理由なんて何一つない。割り込みをしてきた人間と彼女は別人であり、関係ないのだ。彼女に謝らせてしまい、自分が持っている中国人に対する偏見に気づいた私は、急に自分が恥ずかしくなった。その件があってから、人に対する見方が大きく変わった。「〇〇人だからこう」というイメージを持つ前に、目の前の人を一人の人間としてどんな人なのかを見ようとする心が大切であり、その人がどんな人かを判断する必要がある、ということ学んだ。

そんな彼女は2019年、念願だった日本に旅行に来て、約束通り日本を案内することが叶った。数年ぶりに会った彼女は英語も当時から想像できないほど流暢で、イギリスの大学で勉強しているとのことであった。グローバルに活躍するという夢に向かう彼女を見て、自分のモチベーションも刺激された。今でも彼女とは連絡を取り、お互い切磋琢磨し合う良い関係を築けている。私も彼女に負けず、日本を超えてグローバルに活躍する人になるため、外資系の企業で働いている。仕事で会う人も多様であり、海外の人はもちろん、日本人の名前だがずっと海外で育った人、両親が外国人だが日本で育った人など、ダイバーシティに溢れている。

私はあの日から、自分が関わるどんな人達に対しても、国籍や見た目、宗教などで判断せず、自分が感じたこと、見たことを通じて相手を知り関係を築いていくよう心掛けていく。そのきっかけをくれた中国出身の彼女に感謝を伝えたい。